

〔川崎医療福祉学会ニュース〕

川崎医療福祉学会 第19回研究集会

平成12年11月15日(水)

研究発表

1. 認知発達障害児における事象関連電位の検討

川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科 ○爲季 周平 寺尾 章
 瀬尾 邦子

2. 失語症状の加齢差

— 言語機能の側性化進行仮説の検討 —

川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科 ○種村 純 熊倉 勇美
 近畿福祉大学 大羽 葵
 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科 賀集 寛
 川崎医療福祉大学 医療技術学部 リハビリテーション学科 椿原 彰夫
 川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 感覚矯正学専攻 小坂 美鶴 尾川亜紀子

3. 痴呆性老人の居場所作り

— 特別養護老人ホーム O 痴呆棟における音楽活動を通して —

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 医療福祉学専攻 ○大本真梨子

4. 自閉症児の問題行動に水泳が及ぼす効果

岡山大学大学院 障害児教育専攻 ○杉 哉子
 川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科 小野寺 昇 星島 葉子
 川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康科学専攻 山元 健太 山口 英峰

5. 生体成分分析に関する研究

1) 尿中代謝産物(クレアチニン等)の測定法に関して

川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科 藤井 俊子 ○河邊 聡子

2) 医用動物を使った生体成分分析に関して

川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科 ○小野 章史
 川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 臨床栄養学専攻 井町 和香

6. 運動性食物アナフィラキシーモデルマウス作製の試み

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 健康体育学科 ○矢野 博己
 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床栄養学科 加藤 保子

講演

1. 「韓民族の伝統的家族文化」

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科 教授 金 相圭

2. “The Challenge for Change: Stigma of Mental Illness”

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科 教授 Betty S. Furuta

○印は口演者

学会運営委員長挨拶 寺尾 章 教授

研究発表要旨

認知発達障害児における事象関連電位の検討

川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科 爲季 周平 寺尾 章
瀬尾 邦子

発達障害児を生理学的見地から検討することを目的に、小児群を対象に視覚課題と視覚聴覚課題を用いた事象関連電位 P300を測定した。言語発達遅滞の既往がある群では課題間で差が無く、学習障害の既往がある群は視覚課題で有意に潜時が延長し、課

題間差が大きい傾向が認められた。この結果より、言語発達遅滞児は聴覚フィードバック機構に、学習障害児は視覚情報処理能力に問題のある可能性が示唆された。

失語症状の加齢差

— 言語機能の側性化進行仮説の検討 —

川崎医療福祉大学 医療技術学部 感覚矯正学科 種村 純 熊倉 勇美
近畿福祉大学 大羽 素
川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科 賀集 寛
川崎医療福祉大学 医療技術学部 リハビリテーション学科 椿原 彰夫
川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 感覚矯正学専攻 小坂 美鶴 尾川亜希子

年齢による失語症状の相違を検討した。1、多数例における検討：失語症511例を対象とした。表出型は若いほど多く、受容型は高齢であるほど多かった。2、病巣群別の年齢比較：左半球一側病変57例を対象とした。広範病巣例で若年に Broca 失語が多

く、中年以降に全失語が増加した。後方病巣例では若年では失名詞失語が多く、老年では Wernicke 失語が多くなった。失語症状では音韻処理に関わる機能について、加齢に伴って障害が増加していた。

痴呆性老人の居場所づくり

— 特別養護老人ホーム O 痴呆棟における音楽活動を通して —

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学専攻 医療福祉学専攻 大本真梨子

特別養護老人ホームの痴呆棟において、9ヶ月間の音楽活動を実践し、症例研究を行った。その結果、音楽活動を行う時間は、痴呆性老人の情緒の安定が図れた。また、施設に自分の居場所を見出すことが困難な人でも、音楽活動の時には自己を表現し、他者との交流が増えた。

重度痴呆になっても、その人にとって馴染みのある曲は、情動に働きかけ、過去の自分の居場所を思い出させてくれるものである。

音楽活動が痴呆性老人にとって、生活の中の1つの居場所となったと考察した。

自閉症児の問題行動に水泳が及ぼす効果

岡山大学大学院 障害児教育専攻 杉 哉子

川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科 小野寺 昇 星島 葉子

川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康科学専攻 山元 健太 山口 英峰

水中運動が、自閉症児の常同行動、席立ち、反響言語などに及ぼす影響を調べることを目的とした。対象児は7～12歳の4例の自閉症児。水中運動の前後20分のビデオに録画し分析した。その結果、水中

運動中により、常同行動は3例中2例で減少が認められ、席立ちは4例中3例で減少することが認められ、反響言語は3例中1例が減少を認めた。これらの効果に、長期的な持続は認められなかった。

生体成分に関する研究

1) 尿中代謝産物(クレアチニン等)の測定法に関して

川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科 藤井 俊子 河邊 聡子

2) 医用動物を使った生体成分に関して

川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科 小野 章史

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 臨床栄養学専攻 井町 和香

キャピラリー電気泳動法(HPCE)により芳香族有機溶剤尿中代謝産物の馬尿酸、*o-m-p*-メチル馬尿酸、マンデル酸、クレアチニン、尿酸を分析した結果、各代謝産物は7分以内に分離泳動した。特殊健康診断に用いる尿中代謝産物濃度は、尿中クレアチニンで補正するため、Jaffe法、HPLC法による尿中クレアチニンの分析を行い、測定値について比較

した結果、HPCEによる値は他の分析方法による値とよく一致することが認められた。

また、医用動物(30%部分肝切除ラット)を使った生体成分の分析で、対象動物の寿命と生体成分の変動を検討したがクレアチン、アルブミンなどのタンパク代謝およびグルコースなどの糖質代謝は影響を受けなかったことが認められた。

運動性食物アナフィラキシーモデルマウス作製の試み

川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科 矢野 博己

川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科 加藤 保子

運動性食物アナフィラキシーモデルマウス作製のため、近交系マウスB10.Aを用いて、卵白リゾチームをアレルゲンとして感作、その後さらに経口投与、運動を負荷し検討した。その結果、総IgE、特異的IgE、特異的IgG抗体価は上昇し、リゾチーム経口

投与により、運動継続時間が有意に短縮した。運動を負荷したマウス小腸に粘膜上皮細胞傷害が観察され、肝類洞内にリゾチーム流入が確認された。運動性食物アナフィラキシーのモデルとなりうる可能性が示唆された。

講演要旨

1. 「韓民族の伝統的家族文化」

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科 教授 金 相圭

「韓民族の伝統的家族文化」と題して、ビデオにより「韓国人の一生」と「韓国の祭事」を紹介された後、家族の生活と意識に関して、講演された。

家族の名称である姓は、集団名というより、血統名と言える。姓に基づく血縁意識は非常に強く、また、その意識の強化策として、族譜（家系譜）、宗報（新聞）、一族の基本財産、共同墓祀、同姓同本血族の不婚等がある。さらに、名前用の文字は、門中会議で「行列字」として規定され、血縁とその世（ランク）を知る目安となる。

子供育ての意味も、「家の存続のため」が、日本22%、米国11%に対し、韓国は、26%で、「老後への備えとして」等とともに家族主義的傾向が強い。

「親子関係がうまくいっている」は、韓国88%、

米国77%、日本64%の順である。

自分自身に肝心なものとして、「健康」「家族」等を、各国とも挙げており、東洋では「家門や先祖」の重視傾向も強いが（1980年代）、1990年代の“一番大切なもの”は、「家族・子供」が各国とも第1位で、日本90%、韓国82%、米国81%である。

「孝」と「祖先崇拜」は、互いに他を強め合っており、孝の論理的結論が祖先崇拜である。その原理的相違は、孝は生きている父祖に、祖先崇拜は亡き父祖に対する関係に係わっており、それぞれ他は派生的関係にあると、米国のカルプは説いている。

韓国における親孝行と祖先崇拜の慣習は、実に根強く、またその係わり合いも密接で、今もなお強く大事に継承されてきている。

2. “The Challenge for Change: Stigma of Mental Illness”

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科 教授 Betty S. Furuta

The presentation focused upon stigma as it affects mentally ill Japanese whether they are hospitalized or in the community. The need to change traditional treatment beliefs was posed. Currently, mental illness is better explained using the diathesis-stress and chronic illness models. The difficulties in changing people's perceptions and beliefs toward a stigmatized population were examined. An example from northern Italy was

given identifying the characteristics of a successful transfer of most of the long-term, hospitalized patients into the community within a 15 year period. Finally, although no definite answers exist for changing stigma toward the mentally ill, the factors impacting social change were listed as government laws and regulations, community action, media and advocacy, and personal contact.